

# 成人女性の生きがいに関する生涯発達心理学的研究 I

## — 生きがいの意味と生きがいの対象の年代差 —

西村 純一\*, 大井 京子\*\*, 井上 俊哉\*\*\*, 井森 澄江\*\*\*\*

(平成 18 年 10 月 5 日受理)

## Life-span Development Psychological Study of the Purpose in Life among Adult Women I : The Generation Gaps in a Meaning and in a Subject of Purpose in Life.

NISHIMURA, Junichi OOI, Kyoko INOUE, Shunya and IMORI, Sumie

(Received on October 5, 2006)

キーワード：成人女性, 生きがいの意味, 生きがいの対象, 生涯発達心理学的研究, 年代差

Key words : adult women, a meaning of the purpose in life, a subject of the purpose in life, life-span development psychological study, generation gaps.

東 (1999) は, これまでの日本における生きがいへの学術的・科学的アプローチを, 精神医学的アプローチ, 社会科学的アプローチ, 人文科学的アプローチの3つに分けて問題点を検討している。それによると, 神谷 (1966) の『生きがいについて』や小林 (1989) の『生きがいとは何か』などに代表される精神医学的アプローチは, 生きがいを精神身体的現象と見なすところに特色がある。しかし, 主に精神的疾患を患っている人の資料に準拠し, 生きがい喪失になった状態から健康な状態への復帰の過程に焦点があるが, 健康な人の普段の日常生活における生きがいとは異なっていることに留意する必要があるとして, その限界を指摘している。

川北・小林・野田 (1968) の『生きがいの組織論—組織の中の集団と個人』, 久保・名東 (1971) 『生きがいの経営学—人間回復とサラリーマン意識』などに代表される社会科学的なアプローチは, 個人の生きがいを社会や組織との関連から理解しようとするところに特色がある。これらのアプローチは現役サラリーマン, しかも男性サラリーマンの生きがい論に焦点があり, 女性労働者, 自由業者や自営業者, あるいは定年退職者や専業主婦など

への一般化は難しいとしている。

さらに, 生きがいを心の問題としてとらえる人文科学的アプローチには, 心理学, 教育学, 哲学, 宗教学, 宗教哲学, 倫理学, 人間学など多彩な研究が行われているという。これらのアプローチは, いわゆる人生論が少なくないことや, 概して「健康な状態」にある人, それも特定の世代や対象に焦点を絞らないで, 一般論としての生きがい論を展開する傾向があるとしている。また, 最近では, 生きがいの創造をテーマにしたものもあり, 健常からよりプラスへの生きがい研究がなされているという (『生きがいに関する研究会 最終報告書』財団法人シニアプラン開発機構, 1993)。

他方, 日本人がどのようなことを生きがいと考えているか, どんなことに生きがいを見いだしているのか, どのような場でそうした生きがいを獲得しているのか, どのようにして生きがいを維持しているのか, 生きがいは年齢的にどのように変化するのか, 生きがいを規定している要因にはどのようなものがあるのか, といったいわば生きがいの実態については, 必ずしも明らかになってきていない。そうしたなかにおいて, 財団法人シニアプラン開発機構の「サラリーマンの生きがいに関する調査」は, 「生きがい」に関する実態調査としてはもっとも充実しているといわれる (東, 1999)。その理由としては, 東 (1999) は, 1991 年, 1996 年, 2001 年と 3 回にわたって繰り返し実施され, 時系列的な変動を分析できること

\* 文学部心理教育学科老年心理研究室

\*\* 文学部心理教育学科資料室

\*\*\* 教養部情報処理研究室

\*\*\*\* 文学部心理教育学科発達心理研究室

(財団法人シニアプラン開発機構, 1992, 1997, 2002), を指摘しているが, ほかに, 一般論としての生きがい論ではなく, 個々人が感じている普段の日常的な生きがいの意味や生きがいの対象, 生きがい獲得の場を問題にしていること, 現役のサラリーマン男性だけでなく, 現役の女性, 定年退職者, さらに配偶者などの豊富なデータが得られていること, など従来の実態調査にない特色があげられる。この調査は, 今後も継続される方針であり, その成果が期待されるが, 年齢範囲が35歳から74歳であるため, 35歳未満の動向が不明で成人全般の調査として不十分であること, 現役のサラリーマン男性や女性および定年退職したサラリーマン男性や女性の分析に焦点があり, 成人女性に一般化することは難しいなどの限界もある。

そこで, 本研究では, 20歳から80歳に及ぶ成人女性を対象に, 財団法人シニアプラン開発機構で実施されている生きがいに関する調査項目を実施し, 成人女性における生きがいの意味や生きがいの対象のとらえ方やそれらの年代の変動について検討することを目的としている。

方法

調査対象 首都圏のA女子大学, 短期大学(旧制高等専門学校を含む)を卒業した女性(20歳~92歳)を対象に質問紙郵送調査を行った。対象者は同窓会名簿からランダムにサンプリングされた。実施時期は, 2004年10月~12月に実施された。女子大学同窓生4200名に質問紙調査票を郵送し, 記入後返送を依頼した。全体の回収率は23%であったが, 年代別にみると回収率は13%~35%まで変化した。おおむね年代の高い方が回収率はよかった。表1は年代別に配布数, 調査対象者数, 回収率を示したものである。

調査内容と分析内容 調査票は「親子関係の生涯発達

表1 年代別対象者数 (回収数)

年代	配布数	回収数	回収率
20代	800	101	13%
30代	800	120	15
40代	700	153	22
50代	550	131	24
60代	550	186	34
70代	600	209	35
80代*	200	47	24
全体	4200	979	23

(\* 92歳 1名を含む) 欠測値 32。

心理学的研究」の一環として実施され, 生きがい獲得の場, 生きがいの意味, 生きがいの対象のほかに, 理想の生き方, 実際の生き方, 夫婦関係, 現在の愛着(IWM尺度), 青年期の親への愛着(IPA), 親と自分との関係(娘性を含む), 老いてくる親への世話についての態度, 自分自身や親の高齢化に伴う意識・生活に対する希望, および自分自身の子育て行動・感情, フェースシートなど, 265項目からなる。

本研究で分析する生きがいの意味と生きがいの対象の質問内容は次の通りである(財団法人シニアプラン開発機構, 2002)。

生きがいの意味についての質問

問 よく「生きがい」と言われますが, 次の中で「生きがい」を表すのに最も適当なのはどれだと思いますか。あなたのお考えに最も近いものから2つまで選んでください。

1. 生活の活力やはりあい
2. 生活のリズムやメリハリ
3. 心の安らぎや気晴らし
4. 生きる喜びや満足感
5. 人生観や価値観の形成
6. 生きる目標や目的
7. 自分自身の向上
8. 自分の可能性の実現や何かをやりとげたと感じる  
こと
9. 他人や社会の役に立っていると感ずること
10. その他( )

生きがいの対象についての質問

問 あなたは現在, どのようなことに生きがいを感じますか。(○は3つまで)

- 1.仕事
- 2.趣味
- 3.スポーツ
- 4.学習活動
- 5.社会活動
- 6.自然とのふれあい
- 7.配偶者
- 8.子ども・孫・親などの家族・家庭
- 9.友人など家族以外の人との交流
- 10.自分自身の健康づくり
- 11.ひとりで気ままにすごすこと
- 12.自分自身の内面の充実
- 13.その他( )

## 結果と考察

## (1) 生きがいの意味について

表2ならびに図1は、生きがいの意味のカテゴリーごとに、各年代の選択率を示したものである。全体として、生きがいの意味としてもっとも多かったのは、「生きる喜びや満足」の43.4%で、このほか「自分の可能性の実現や達成感」(32.2%)、「他人や社会の役に立っていること」(24.6%)、「自分自身の向上」(21.9%)、「生活の活力やはりあい」(21.5%)、「心の安らぎと気晴らし」(20.1%)の順になっている。逆に、選択率が低いのは、「生活のリズムやメリハリ」(5.5%)、「人生観や価値観の形成」(7.0%)でともに1割未満にとどまっている。財団法人シニアプラン開発機構の過去3回の調査のうち直近の2001年に実施された第3回調査(以下、簡単にサラリーマン調査と呼ぶことにする)と比較すると、「生きる喜びや満足」はサラリーマン調査でも唯一40%台をキープしており、この点では同じといえる。このほか、サラリーマン調査の場合は、「自分の可能性の実現や達成感」(28.2%)、「心の安らぎと気晴らし」(26.7%)、「生活の活力やはりあい」(26.1%)、「自分自身の向上」(18.3%)、「生きる目標や目的」(17.5%)の順になっている。「自分の可能性の実現や達成感」が第2位にきている点は同じであるが、同窓生調査で第3位であった「他人や社会の役に立っていること」はサラリーマン調査では17.1%でやや順位が低い。一方、同窓生調査では第6位と順位の低かった「心の安らぎと気晴らし」が第

3位に上昇しており、このあたりに調査対象者の違いが現れてきていると考えられる。なお、サラリーマン調査の女性に限ってみると、「心の安らぎと気晴らし」が第2位に上昇し、「自分の可能性の実現や達成感」を上回っている。サラリーマンの場合には、それだけストレスが強いことを物語っているのかもしれない。また、同窓生調査で選択率が低い「生活のリズムやメリハリ」や「人生観や価値観の形成」は、サラリーマン調査でもそれぞれ10.2%、8.7%と低く、同じ傾向であった。

各カテゴリーの選択率の順位の年代的な変動についてみると、「生きる喜びや満足」はどの年代でもトップというわけではない。60代と70代では、トップの座をほかに譲っている。代わりに、60代では「他人や社会の役に立っていること」、70代では「自分の可能性の実現や達成感」がトップになっている。「他人や社会の役に立っていること」は順位変動が大きく、60代ではトップであるが、他の年代では40代と70代で第3位と比較的高いが、他の年代は第4位から第7位と低い。このように見ると、60代で特に成人女性の社会貢献意識の高まりを感じる。サラリーマン調査の場合は、分析の年齢区分が違うので一概に比較できないが、「他人や社会の役に立っていること」は年代と共に高まる傾向にあり、しかもその傾向は女性よりもむしろ男性の方が強い傾向がうかがわれる。定年退職後の男性サラリーマンに特に社会貢献意識が高くなっていると推測される。また、「自分の可能性の実現や達成感」は20代から60代にかけて第2位ないし第3位の順位をキープしており高い順位にあるが、

表2 生きがいの意味のカテゴリー別年代別にみた選択率

	20代 (102)	30代 (120)	40代 (153)	50代 (131)	60代 (186)	70代 (209)	80代 (47)	全体 (948)
生活の活力やはりあい	16.7 ⑤	23.3 ③	30.7 ②	22.1 ④	22.6 ④	17.2 ⑥	19.1 ⑤	21.5 ⑤
生活のリズムやメリハリ	0.0 ⑩	4.2 ⑧	2.0 ⑨	6.1 ⑧	9.1 ⑨	9.1 ⑨	4.3 ⑨	5.5 ⑨
こころの安らぎや気晴らし	21.6 ④	16.7 ⑥	15.7 ⑦	21.4 ⑤	22.0 ⑤	20.6 ⑤	27.7 ③	20.1 ⑥
生きる喜びや満足感	67.6 ①	55.0 ①	54.9 ①	42.0 ①	32.8 ②	31.6 ②	36.2 ①	43.4 ①
人生観や価値観の形成	5.9 ⑧	1.7 ⑨	3.9 ⑧	6.1 ⑧	10.2 ⑧	10.0 ⑧	12.8 ⑦	7.0 ⑧
生きる目標や目的	15.7 ⑥	10.8 ⑦	17.0 ⑥	16.8 ⑥	12.9 ⑦	11.5 ⑦	6.4 ⑧	13.3 ⑦
自分自身の向上	25.5 ③	20.0 ⑤	19.6 ⑤	23.7 ③	19.4 ⑥	25.4 ④	23.4 ④	21.9 ④
自分の可能性の実現	26.5 ②	35.8 ②	24.8 ③	35.1 ②	32.3 ③	37.8 ①	36.2 ①	32.2 ②
他人や社会の役に立つ	12.7 ⑦	22.5 ④	24.8 ③	16.8 ⑥	34.9 ①	29.2 ③	19.1 ⑤	24.6 ③
その他	1.0 ⑨	0.8 ⑩	0.7 ⑩	0.0 ⑩	0.0 ⑩	0.0 ⑩	0.0 ⑩	0.3 ⑩

( )内は度数、数字はパーセント、マル数字は年代内の順位

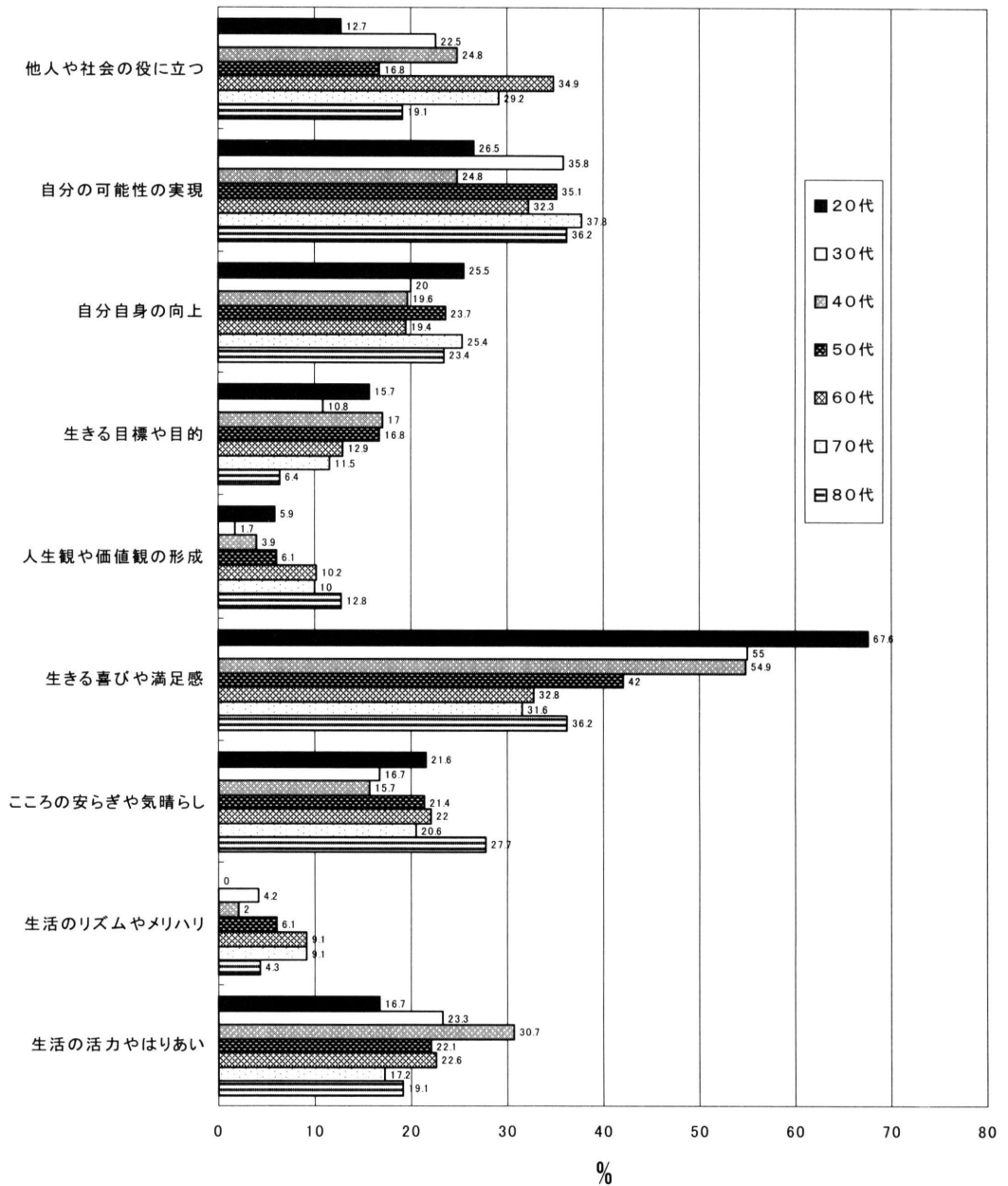


図1 生きがいの意味のカテゴリー別年代別にみた選択率

特に 70 代、80 代においてトップの座に躍り出ている。人生の最終ステージに近づくと、自己実現の意識がもっとも高まるという点は、生涯発達の視点からも注目し得る結果である。

## (2) 生きがいの対象について

表 3 ならびに図 2 は、生きがいの対象のカテゴリーごとに、各年代の選択率を示したものである。全体として、生きがいの対象としてもっとも多かったのは、「子ども・孫・親などの家族・家庭」の 46.0%で、このほか「趣味」(43.1%)、「友人などの家族以外の人との交流」(32.4%)、「仕事」(25.0%)、「配偶者・結婚生活」(24.0%)、「自分自身の内面の充実」(23.7%)、の順になっている。逆に、選択率が低いのは、「学習活動」(5.5%)、「スポーツ」(6.2%) でともに 1 割未満にとどまっている。サラリーマン調査の場合と比較すると、「子ども・孫・親などの家族・家庭」はサラリーマン調査でも 56.6%とダントツに高く、この点では同じといえる。このほか、サラリーマン調査の場合は、「趣味」(47.2%)、「仕事」(39.6%)、「配偶者・結婚生活」(24.6%)、「自分自身の健康づくり」(18.6%)、「友人などの家族以外の人との交流」(18.1%)、の順になっている。「趣味」が第 2 位にきている点も同じであるが、同窓生調査で第 3 位であった「友人などの家族以外の人との交流」はサラリーマン調査では第 6 位で順位が低い。このあたりは、同窓生調査の場合、回収

率をみると 60 代、70 代が他の年代に比較して多く、それだけ高齢世代の傾向が強く反映されているためとみられる。一方、サラリーマン調査では、同窓生調査では第 4 位であった「仕事」が第 3 位、第 5 位であった「配偶者・結婚生活」が第 4 位にそれぞれ浮上しており、ここにも調査対象者の違いが現れてきていると考えられる。サラリーマンの場合には、やはり仕事とそれを支えてくれる夫婦関係が重要視されているということではなかろうか。また、同窓生調査では「学習活動」や「スポーツ」の選択率が低かったが、サラリーマン調査でも「学習活動」7.0%と低いが、「スポーツ」は 15.6%と増えている。他方、同窓生調査では 10.2%あった「社会活動」が 7.6%に低下しており、対象者の年代的違いが影響していると推測される。

各カテゴリーの選択率の順位の年代的な変動についてみると、「子ども・孫・親などの家族・家庭」はどの年代でもトップというわけではない。60 代と 70 代では、トップの座を「趣味」に譲っている。サラリーマン調査でも、「子ども・孫・親などの家族・家庭」は年代が高くなると共に低下し、高齢の年代ではトップの座を「趣味」に譲っている。また、「子ども・孫・親などの家族・家庭」は、20 代では 5 位にとどまっている。20 代は、「友人などの家族以外の人との交流」がトップで、「仕事」がそれに続き、家族以外のところに精神的エネルギーを振り

表 3 生きがいの対象のカテゴリー別年代別にみた選択率

	20代 (102)	30代 (120)	40代 (153)	50代 (131)	60代 (186)	70代 (209)	80代 (47)	全体 (948)
仕事	44.1 ②	29.2 ⑤	37.3 ②	33.6 ③	17.7 ⑧	12.0 ⑨	8.5 ⑨	25.0 ④
趣味	35.3 ③	33.3 ④	32.7 ③	43.5 ②	53.2 ①	53.6 ①	46.8 ②	43.1 ②
スポーツ	10.8 ⑧	7.5 ⑧	7.8 ⑩	5.3 ⑪	5.9 ⑪	5.7 ⑫	0.0 ⑫	6.5 ⑪
学習活動	4.9 ⑪	3.3 ⑫	4.6 ⑫	5.3 ⑪	5.9 ⑪	12.0 ⑨	2.1 ⑪	6.2 ⑫
社会活動	0.0 ⑬	5.0 ⑪	11.1 ⑧	9.9 ⑩	16.7 ⑨	13.4 ⑧	6.4 ⑩	10.2 ⑩
自然とのふれあい	11.8 ⑨	7.5 ⑧	9.2 ⑨	18.3 ⑦	27.4 ④	22.5 ⑥	19.1 ⑦	17.5 ⑧
配偶者・結婚生活	25.5 ④	37.5 ②	30.7 ④	25.2 ⑥	19.9 ⑦	18.2 ⑦	17.0 ⑧	24.0 ⑤
子ども・孫・親などの家族・家庭	24.5 ⑤	65.0 ①	62.1 ①	47.3 ①	42.5 ②	40.7 ②	51.1 ①	46.0 ①
友人などの家族以外の人との交流	51.0 ①	35.8 ③	30.7 ④	28.2 ⑤	30.6 ③	28.7 ④	31.9 ⑤	32.4 ③
自分自身の健康づくり	10.8 ⑩	5.8 ⑩	7.8 ⑪	15.3 ⑨	23.7 ⑤	33.5 ③	44.7 ③	19.7 ⑦
ひとり気ままに過ごす	16.7 ⑦	12.5 ⑦	13.7 ⑦	17.6 ⑧	14.0 ⑩	12.0 ⑨	21.3 ⑥	14.4 ⑨
自分自身の内面の充実	24.5 ⑤	19.2 ⑥	22.9 ⑥	29.0 ④	22.0 ⑥	23.0 ⑤	34.0 ④	23.7 ⑥
その他	2.9 ⑫	1.7 ⑬	2.0 ⑬	0.8 ⑬	1.6 ⑬	1.4 ⑬	0.0 ⑫	1.5 ⑬

( )内は度数、数字はパーセント、マル数字は年代内の順位

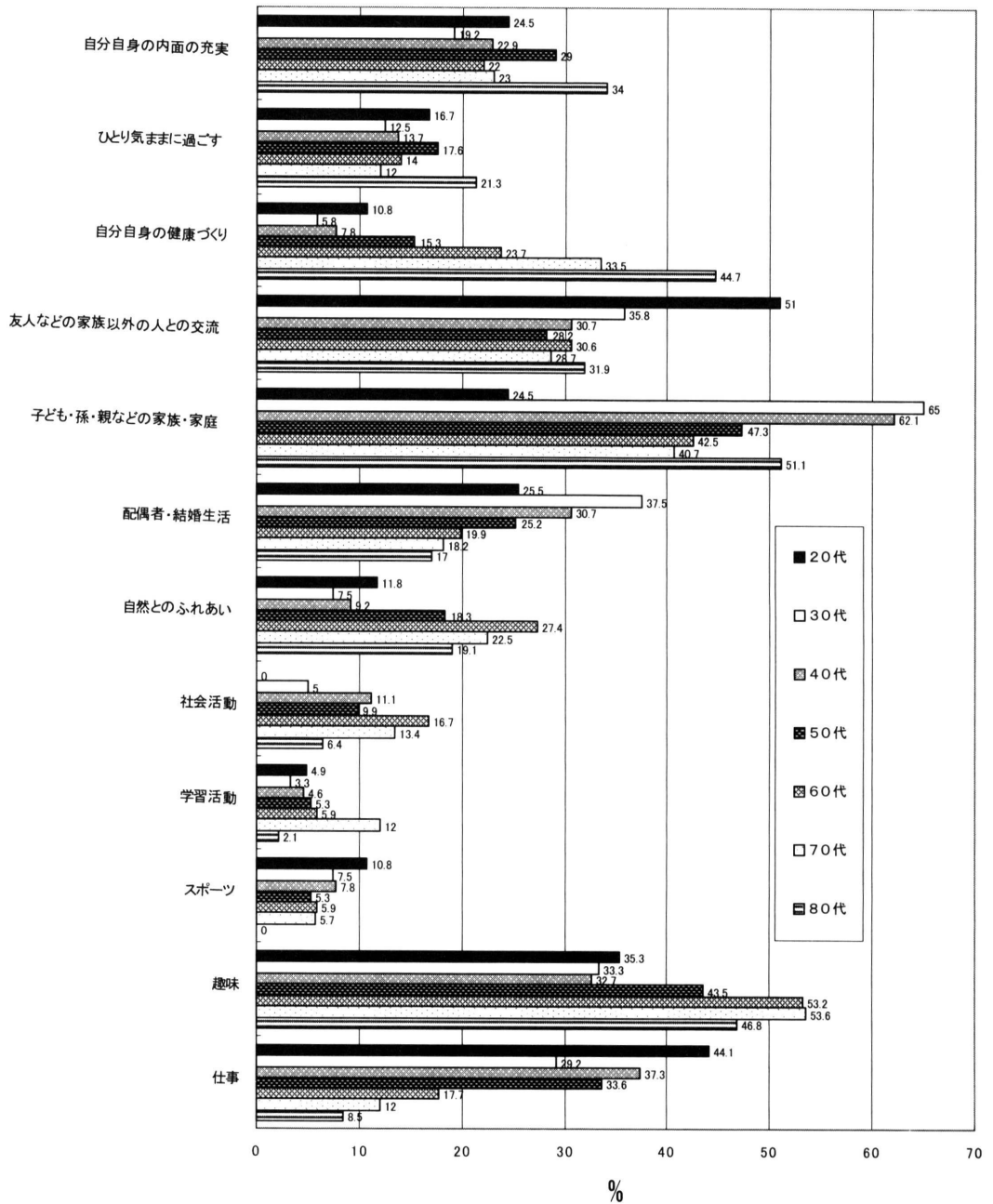


図2 生きがい対象のカテゴリ別年代別にみた出現率

向けているとみられる。「趣味」は年代が高くなると共に順位が上がる傾向があり、60代以降はトップである。こうした傾向は、サラリーマン調査の場合も同様である。「友人などの家族以外の人との交流」は20代で第1位であるが、それ以降は、30代第3位、40代第4位、50代第5位と順位を下げていくが、60代で再び第3位に返り咲き、その後は、70代第4位、80代第5位と順位を下けている。サラリーマン調査についてみると、「友人などの家族以外の人との交流」は年代的傾向はあまり認められないが、男性12%に比して女性36.7%と女性に多い傾向がある。しかも、既婚女性29.1%に対し、未婚女性46.2%と圧倒的に高く、未婚女性が友人を重視している傾向がうかがわれる。また、「仕事」は20代が44.1%でもっとも高く、その後30代で30割を切るところまで低下するが、40代で再び37.3%まで回復するも、その後は年代が上がると共に低下している。これは、典型的な女性のM字カーブを示しており、30代の落ち込みは結婚退職・出産・子育てなどの影響とみられる。サラリーマン調査の場合も、男女ともに年齢が上がると共に低下の傾向がある。また、女性の場合、30～44歳が45～54歳よりも低い。出産・子育ての影響があるとみられる。「配偶者・結婚生活」は30代でピークとなり、その後は下降曲線を辿り、60代以降は横ばいである。20歳代で低いのは、未婚女性が多いためと考えられる。サラリーマン調査もほぼ同様の傾向を示しているが、65歳以後に多少回復の兆しが感じられる。なお、「自分自身の健康づくり」は20代から30代にかけて一時期低下するが、その後、年齢が上がると共に増え、80代では44.7%、第3位の水準にまで到達している点は注目に値する。サラリーマン調査の場合にも、同様の傾向が伺われる。このことは、年齢が上がると共に健康重視の姿勢が強まることの現れと見てよいであろう。

### 総合的考察

以上の結果の考察をふまえると、成人女性の生きがいの意味のとらえ方としては、「生きる喜びや満足感」「自分の可能性の実現や達成感」「他人や社会の役に立っていること」などの選択率が高く、代表的なとらえ方であるといえよう。また、20代から50代までは「生きる喜びや満足感」がトップであるが、60代では「他人や社会の役に立っていること」がトップになり、70代では「自分の可能性の実現や達成感」がトップになり、80代では再び「生きる喜びや満足感」がトップになっている。こ

うしたトップの交代にも、それぞれのライフステージで何が重視されているかが反映されていると考えられる。なお、西村(2005a)の生きがいの構造的分析によれば、これらの「生きる喜びや満足感」「自分の可能性の実現や達成感」「他人や社会の役に立っていること」は、いずれも生活充実感のカテゴリーに位置づけられ、「心の安らぎや気晴らし」「生活のリズムやメリハリ」「自分自身の向上」などの生活安定感のカテゴリーの対極にあるとみられる。そして、生活充実感としての生きがいを求めると、生活安定感としての生きがいは遠くなり、逆に、生活安定感としての生きがいを求めると、生活充実感としての生きがいは遠くなる関係にある。今後は、たんに選択率の問題ではなく、どういう人が生活充実感の生きがいを志向し、どういう人が生活安定感の生きがいを志向しているか明らかにしていく必要があろう。また、「人生観・価値観の形成」「生活の活力やはりあい」など選択率の少ない生きがいについても、どのような人がそのような生きがいを求めているのか、明らかにしていくことが重要であると考えられる。

また、成人女性の生きがいの対象のとらえ方としては、「子ども・孫・親などの家族・家庭」「趣味」「友人などの家族以外の人との交流」などの選択率が高く、代表的なとらえ方であるといえよう。また、「子ども・孫・親などの家族・家庭」は、20代で第5位、60代と70代で趣味に第1位を譲る以外は第1位である。60代、70代で趣味に向かうのは、子どもなどから離れて精神的エネルギーを振り向ける対象を探すためとみられるが、80代再び家族志向が復活しているところを見ると、女性の家族・家庭志向が極めて根強いものであることが示唆される。また、「趣味」は20代から40代までは横ばいであるが、50代以降、年代と共に上がる傾向があり、とくに高齢期の生活を豊かにする上で重視されているとみられる。なお、西村(2005b)の生きがいの対象の構造的分析によれば、「子ども・孫・親などの家族・家庭」生きる喜びや満足感」「仕事」や「配偶者・結婚生活」など楽しくもあるが社会的責任のあるカテゴリーに位置しているのに対して、「趣味」や「友人などの家族以外の人との交流」などは、「ひとり気ままに過ごす」「自然とのふれあい」「学習」など気楽な生活のカテゴリーに位置しているとみられる。そして、社会的責任のある生きがい対象を求めると、気楽な生活の生きがい対象は遠くなり、逆に、気楽な生活としての生きがい対象を求めると、社

会的責任のある生きがい対象は遠くなる関係にある。年代が上がると共に気楽な生活の志向が強まる傾向が伺われるが、今後は、たんに選択率の問題ではなく、どういう人が社会的責任のある生活の生きがい対象を志向し、どういう人が気楽な生活の生きがい対象を志向しているか明らかにしていく必要があろう。また、「自分自身の内面の充実」、「スポーツ」など選択率の少ない生きがい対象についても、どのような人がそのような生きがいを求めているのか、明らかにしていくことが重要であると考ええる。

## 付 記

本研究は、東京家政大学大学院共同研究推進費によって実施されました。

## 引用文献

- 1) 東清和 1999 エイジングと生きがい 東清和 (編) エイジングの心理学 早稲田大学出版部 Pp.131-168.
- 2) 神谷美恵子 1966 生きがいについて みすず書房
- 3) 川喜多三郎・小林茂・野田一夫 1968 生きがいの組織論—組織の中の集団と個人 日本経営出版会
- 4) 小林司 1989 生きがいとは何か NHKブックス
- 5) 久保敏治・名東孝二編 1971 生きがいの経営哲学 一人間回復とサラリーマンの意識 三省堂新書
- 6) 西村純一 2005 a サラリーマンの生きがいの構造—年齢差および性差の検討 東京家政大学研究紀要 第45集(1) pp.209-214.
- 7) 西村純一 2005 b サラリーマンの生きがい対象の構造—年齢差および性差の検討—立教大学社会学部応用社会学研究 No.47 pp.143-148.
- 8) シニアプラン開発機構 1992 第1回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして
- 9) シニアプラン開発機構 1993 生きがいに関する研究会最終報告書—サラリーマンシニアの生きがい創造に向けて
- 10) シニアプラン開発機構 1997 第2回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして
- 11) シニアプラン開発機構 2002 第3回 サラリーマンの生活と生きがいに関する調査：サラリーマンシニアを中心にして



### Abstract

Life-span Development Psychological Study of the Purpose in Life among Adult Women I :  
The Generation Gaps in a Meaning and in a Subject of Purpose in Life.

In this study, we examined the meaning of purpose in life and the concept of the objects of purpose in life in cases of adult women, and their generation gaps. The subjects are 979 females in their 20s to 80s. We carried out a survey by post on 4,200 alumnae of Woman's University A (including its college and professional school under the old system) located in the Tokyo Metropolitan area, and the response rate was 23%. This study was carried out as part of research into the relationship between parents and children from the viewpoint of lifelong developmental psychology. The survey slips comprised 265 items of questions which include care of aging parents, lifestyle in senescence, the husband and wife's relationship, affectionate relationship between parents and children, face sheets, in addition to questionnaire sheets concerning life goals.

The largest number of the adult women thought that the purpose in life meant "joy or satisfaction in life to them." The second and the third largest numbers of them thought that it meant "realization of self potential or a sense of achievement" and "a feeling that one is useful for others or society", respectively. However, there was a tendency for the top items of the people in their 60s and 70s were social contribution and self-realization respectively. On the other hand, the largest number of the adult women thought that the object of purpose in life was "family members such as their children, grandchildren and parents, or a family." The second and the third largest numbers of them thought that the purpose in life was "hobbies" and "interchange with people other than their family members such as friends." However, the top item of the people in their 60s and 70s was "hobbies," which shows that they tend to use their mental energy for things other than family members.